

懐愈々□固より深くして、四海一家と為し共に万載の太平を享けん。誠に懇懃を感じて深く用て喜謝す。此の為に今、正使歩馬結制等を遣わし礼物を齎捧し、順字号海船一隻に坐駕し詣前して奉獻せしめ、少しく微誠を伸べて以て遠意を表す。幸希わくは海納せよ。仍お望むらくは来人の蘇木・胡椒等の物を貨易するを寛恤せんことを。早やかに風に趁りて回国せしむれば、便益と為すに庶からん。今、奉獻の礼物を將て後に開坐す。咨して施行を請う。須らく咨に至るべき者なり。

今開す

閃段五匹 素青段二十四

大青盤二十個 小青盤四百個

小青碗二千個 腰刀五把

扇三十把 硫黄二千五百斤大 三千斤小

正統二年（一四三七）八月十六日

礼儀の事 順字号船 通事梁徳仲 火長等物度

注\*本文書はあて先を欠くが、暹羅国への咨であろう。

1-40-22

琉球国中山王より（暹羅国あてカ）、欲沙每等を遣わして速やかな交易を請う咨（一四三七、八、一六）

琉球国中山王、見に礼儀の事の為にす。

切に深く感ずるに縁るに、貴国は情意もて恵みを下し、近年、船の回□する毎に遠人を寛恤し貿易を従容し、早やかに回国せしむ。誠に感激の心を以てして、未だ曾て少しも替らず。今此に特に正使欲沙每等を遣わし、礼物を齎捧し詣前して奉獻せしめ、以て芹忱を表す。幸希わくは叱納せよ。更に煩わくは来人の磁器等の物は、蘇木・胡椒等の貨を易買し来船に装載せしむるを聴さんことを。早やかに風に趁りて回還せしむれば便益なり。今、將に奉獻の礼物を開坐せんとす。咨して施行を請う。須らく咨に至るべき者なり。

今開す

閃色段五匹 素青段二十四

腰刀五把 扇三十把

大青盤二十個 小青盤四百個

小青碗二千個 硫黄二千五百斤大 三千斤小

正統二年（一四三七）八月十六日 安字号船通事鄭智 火長昆第

礼儀の事

注\*本文書はあて先を欠くが暹羅国への咨である。

正統三年（一四三八） 月 日

1-40-23

琉球国王尚巴志より（爪哇国あてカ）、歩馬結制等を遣わし

て速やかな交易を請う咨（一四三八、□、□）

琉球国王尚巴志、見<sup>げん</sup>に礼儀の事の為にす。

久しく聞くに、貴国は諸珍を産積し、華麗なる景致<sup>けいし</sup>にして、君相は仁賢、国人は忠義にして以て遠人を寛柔するに及ぶ。是れを以て四海の遐邇、競趨<sup>きょうす</sup>して来庭し、皆然<sup>けいぜん</sup>として歓樂し大いに太平を享<sup>かう</sup>くれば、誠に当に礼儀に合<sup>あ</sup>うべく馳賀を以てせん。此の為に特に正使歩馬結制等を遣わし、永字号海船一隻に坐駕し、礼物を齎<sup>し</sup>捧し前詣して奉獻せしめて以て遠意を表す。万望むらくは海納せよ。永く四海一家を結び盟好を相い通せん。仍<sup>なほ</sup>お希<sup>ねが</sup>う、早<sup>すみ</sup>やかに人船を寛恤し買売せしめ、風信に趕趁して時月に回国せしめよ。及び照らすに、以先の宣徳五年（一四三〇）、本国始めて遣使を行い船を駕して礼を奉るに、珍賄を回恵し及び人船を恤するを感蒙し、俱<sup>とも</sup>に安んじて国に到る外、理として合に通行し奏謝して知会すべし。今、奉獻の礼物を將て数目を後に開坐す。合行<sup>あさ</sup>に移咨すべし。施行を請う。須らく咨に至るべき者なり。

今開<sup>ひら</sup>す

注\*本文書はあて先を欠くが爪哇国あての咨である。爪哇には文中

にあるように宣徳五年（一四三〇）初めて派船し〔四〇〇九〕、また〔四〇二六〕の爪哇宛の咨に宣徳五年及び正統三年に遣使したむねの記事があることによる。

(1) 景致 風光、景色。

(2) 皆然 ことごとくそのように。

1-40-24

琉球国中山王より（暹羅国あてカ）、明泰等を遣わして速や

かな交易を請う咨（一四三八、一〇、四）

琉球国中山王、見<sup>げん</sup>に礼儀の事の為にす。

照得するに本国は歴として世代より相い通じて音好す。毎<sup>つね</sup>に懐うに海を隔つること遙かなりと雖も、逐歳遣使するを忘れず。切に先祖の深交を念<sup>おも</sup>い、永く四海以て一家なるを堅くし、礼義を宏興し太平を慶享すれば、諸隣をして焉<sup>こゝ</sup>を讚揚せしむるに庶<sup>ちか</sup>からん。能く豈に美ならざらんや。専ら正使明泰・通事鄭智等を遣わし、永字号海船一隻に坐駕し礼物を齎捧し、貴国に前詣し奉獻せしめて以て芹誠を表す。收受すれば万幸なり。仍<sup>なほ</sup>お煩<sup>わづ</sup>わくは早<sup>すみ</sup>やかに